

〈特集：ワークショップ・第27回年次学術集会より〉

序文（巻頭言）：「検査室から飛び出して活躍する臨床検査技師」

鈴木 英明

The activities of medical laboratory scientists outside the laboratory

Hideaki Suzuki

Summary Forty-eight years have passed since the law on medical laboratory scientists (MLSs) came into effect (Decree No. 305 of October 14, Showa 45). The work of MLSs is now expanding to cover hospital wards and in-home medical care. At the annual meeting in Niigata, we held a workshop called “The activities of MLSs in places other than the laboratory.” Three MLSs talked about their work, both individually and in teams, outside the laboratory. Here, we report the contents of the two lectures as special articles.

An introductory lecture was delivered by Mr. Rikei Kosakai, elaborating on the activities of MLSs in disaster medical care.

Next, Miss Ayako Nogami gave a lecture on the efforts of MLSs in describing clinical examinations.

These lectures have enhanced our awareness about the experiences of MLSs and their activities in various scenarios outside the laboratory. Thus, we understand how new MLSs’ activities contribute to various aspects of medical care.

Key words: Medical laboratory scientist, Disaster medical care, Description of clinical examination

1970年に臨床検査技師、衛生検査技師等に関する法律が改められ生理機能検査や採血業務の医療行為を行える臨床検査技師が誕生し48年が経過した。近年、2015年の法改正により検体採取と嗅覚や味覚検査が生理機能検査に追加され、さらに2018年の医療法改正では検体検査の精度の確保が追加された。臨床検査技師の業務が拡充する一方で、保健医療分野への人工知能(AI)とロボットの開発が加速化され、臨床検

査技師の機械化代替率が高いのでは？との声も聞こえてくる。2025年の日本は後期高齢者が増え、少子・超高齢化と人口減少により社会保障費の増大が懸念されている。この問題を解決するため厚生労働省は高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築を推進している。そこで将来の変革に対応すべく日本臨床衛生検査技師会は、検査説明・

北里大学保健衛生専門学院臨床検査技師養成科
〒949-7241 新潟県南魚沼市黒土新田500番

Department of Medical Technology, Kitasato Junior
College of Health and Hygienic Sciences
500 Kurotsuchishinden, Minamiuonuma, Niigata 949-
7241, Japan

相談ができる臨床検査技師育成事業、検体採取等に関する厚生労働省指定講習会、病棟業務実践講習会、認知症疾患への対応力向上講習会や在宅医療への臨床検査技師の参画を事業展開している。

このような背景の中、新潟で開催された学術集会では「検査室から飛び出して活躍する臨床検査技師」と称してワークショップを開催し、3名の臨床検査技師の方々に検査室以外で活躍する臨床検査技師の取り組みや他職種とのチームワークについて具体的な経験談を語っていただいた。そして今回の特集ではそのうち2名の方々に執筆頂いた。

一つは「検体検査担当技師が検査室以外で活躍するために～東日本大震災を経験して取り組んだこと～」と題して東北医科薬科大学病院中央検査部小堺利恵先生からご執筆頂いた。東日本大震災当時、石巻で勤務されていた小堺先生から、患者との接点が少ない臨床検査技師の災害時と災害後のチーム医療への参画について話を伺った。参画には、患者だけではなく、他医療従事者間との信頼関係構築が大切であるとのことを示された。

二つ目は「病棟・外来における検査説明への取り組み－13年を振り返って－」と題して飯田市立病院臨床検査科野上綾子先生にご執筆いただいた。糖尿病療養指導士として始めて患者さんへの検査説明に加わり、市民向けの出前講座や糖尿病療養指導以外も血液検査結果を説明するまでになり、専門性を活かした検査説明によって他職種医療従事者と協働し、患者さんに寄り添うことができるようになったことを示された。

今回、検査室以外の様々な場面で活躍している臨床検査技師の経験を伺うことができた。このワークショップを機に、次世代医療に貢献する新たな職業意識の醸成ができたと感じている。AIはデータ収集や処理による戦略構想や解析には長けているが、新しいものを生み出す能力、すなわち創作創造には向いていないと想像する。今回、講演をいただいた臨床検査技師の方々のように躊躇せずに新しい業務に挑む姿を拝聴すると、将来、AIやロボットに利用されずに、AIやロボットを有効活用する臨床検査技師があちらこちらで拝見できるのではないかと確信する。